スウェーデン留学記

Division of Transplantation Surgery, Karolinska University Hospital Huddinge

森大樹

島田光生教授のご厚意により、2007 年 10 月からスウェーデンのカロリンスカ大学病院の移植外科に留学させていただいております、平成 14 年徳島大学卒業の森大樹（もりひろき）と申します。Ericzon 教授のもと留学先では、臨床と研究両方に従事しております。臨床は主に肝移植、研究は移植免疫をテーマに取り組んでおります。

スウェーデンは社会保障制度が整った豊かな福祉国家として世界的に有名な国でありますが、スウェーデン・アカデミーによるノーベル賞授与も世界的権威として周知のことと思います。また、その他にも日本でも親しみのあるバイキング料理の発祥の地でもあります。母国語はスウェーデン語ですが近年移民を受け入れており、幼い頃からバイリンガル生活をしているため、スウェーデン人はほぼ全員が英語を話せます。

こちらへ来て約 4 ヶ月が経ちましたが、来た当初よりは知り合いも増え、こちらの生活にも段々と慣れてきたように思っております。慣れない英語に悪戦苦闘の毎日ではありますが、異国の人々とのふれあいは非常に新鮮であります。また、日本でいう忘年会などのパーティーから他にも色々なホームパーティーにまで声をかけていただき、異文化に触れられる機会はなかなか無いと思い、全てに参加させてもらっております。当然帰りが遅くなることもありますが、スウェーデンは非常に治安も良く、特に危険と感じたことは今のところありません。

私が所属している移植外科には、ヨーロッパはもちろん、南米、アフリカ、アジアというように本当に色々な国々から集まっておりまして、色々な個性が結集しております。チームワークも抜群で、とにかくみんな非常に友好的でとても優しいです。Ericzon 教授をはじめ、移植外科の皆様には本当に良くしてもらっております。スウェーデンでの生活は快適か、困っていることはないか、と必ず聞いてくれます。

また、スウェーデンに初めて来た時に、スタッフの方々やスウェーデン在住

の日本人の方々から、タイミングの悪い時にやってきたねとよく言われました。今から太陽の日照時間はどんどん短くなるし、-20℃くらいまで寒くなるからだよと聞かされた時は、はたして極寒の生活に慣れていない私は無事に冬を過ごせるだろうかといきなり不安を覚えました。しかし、今年は例年に比べて類を見ない程の暖冬のようで、雪は時々降りましたが確かに寒すぎることはなく、ゆっくりではありますが春が近づいてきているように感じております。

さて、最近の私はというと、研究では膵移植と肝移植をメインに取り組んでおります。ラットに対して膵島細胞移植を行い、その移植した膵島細胞の活性を評価しているところであります。まだ移植する細胞の数などを決めている段階であり、モデルを作成している段階であります。また、高圧酸素療法はヒートショックプロテインの誘導を通して肝再生を促進するという日本での私の研究結果に興味を持っていただき、日本でも研究テーマであった高圧酸素療法がこちらでも認められまして、それを用いたプロジェクトを今現在立ち上げているところであります。ラット、ブタに対して肝移植を施行し、高圧酸素療法が移植免疫に与える影響について検討していく予定であります。

また、臨床では脳死肝移植に参加させてもらっております。スウェーデンの我々の施設では、1年間に約60例の肝移植を行っております。ドナー患者からのグラフト摘出、摘出したグラフトを移植できるように準備するバックテーブル、レシピエント患者への肝移植とフルコースで入らせてもらっており、かなり忙しいですが非常に貴重な経験をさせてもらっていると自負しております。

新天地が海外ということもあり、毎日が挑戦ではありますが、新しい発見の毎日でもあります。まだ始まったばかりですが、スウェーデンで暮らし、学びそして働くといった日本では得られない経験は本当にすばらしいものであると実感しております。

医局の方々にはご迷惑をおかけしているとは存じますが、貴重な経験をさせていただいていると常々思い、頑張っております。また、私のような若輩者を送り出していただき、このような未体験の世界を見せていただいた島田光生教授には本当に感謝しております。この留学記が皆様の留学の一助になれば幸甚であります。これからもご教導の程、宜しくお願い致します。